

## P-065

## 幼児の食生活等に対する簡易評価ツールの基準関連妥当性の検討

羽入田彩花<sup>1)</sup>、佐々木溪円<sup>1)</sup>、加藤 琉愛<sup>1)</sup>、  
多田 由紀<sup>2)</sup>、小林 知未<sup>3)</sup>、和田 安代<sup>4)</sup>、  
横山 徹爾<sup>4)</sup><sup>1)</sup>実践女子大学 生活科学部 食生活科学科、<sup>2)</sup>東京農業大学 応用生物科学部 栄養科学科、<sup>3)</sup>武庫川女子大学 食物栄養科学部 食物栄養学科、<sup>4)</sup>国立保健医療科学院 生涯健康研究部

【目的】 幼児期の成長・発達は、栄養素等摂取状況を含む生活習慣により左右される。幼児の体格変化が生じる前に、保健指導の必要性がある者を特定することで、保健指導の早期介入が可能である。そこで、我々は、幼児の食生活等の簡易評価ツールを作成し、論理的妥当性等を検討してきた。ここでは、既存のヘルスリテラシー (HL) 尺度で測定した母親のHLを用いて、簡易評価ツールの基準関連妥当性の検討結果を報告する。

【方法】 簡易評価ツールは、1歳6ヶ月以上3歳未満用 (3歳未満) と3歳以上6歳未満用 (3歳以上) の2種類を作成しており、いずれも食物摂取状況、食事時の様子および生活習慣等の22項目で構成されている。各項目の選択肢には、望ましい状態 (0点) から望ましくない状態 (4点) の評点を付与し、高値であるほど保健指導の必要性がある者とした。2024年に、インターネット調査会社の登録パネルから抽出した日本全国に在住する幼児の母親を対象とした横断調査を行った。本調査では幼児の年齢区分別で各750人をリクルートし、不適切回答を除いた3歳未満688人、3歳以上706人を解析対象者とした。HLは伝達的・批判的HL尺度を用いて測定し、各年齢群でHL得点の中央値を超過した高HL群 (HHL) と中央値以下の低HL群 (LHL) の2階層に区分した。HL得点と簡易評価ツール得点の関連は、年齢区分別にt検定で評価した。

【結果】 両年齢区分で、LHLと比較して、HHLの簡易評価ツール得点は低値であった ( $P<0.001$ )。さらに、両年齢区分の「主食・主菜・副菜」および「ファストフード・菓子・甘味飲料」の摂取状況に対する簡易評価ツール得点は、LHLと比較してHHLは低値であった。

【結論】 既存のHL尺度を用いた検討により、簡易評価ツールの基準関連妥当性が示された。

本調査は、令和6年度こども家庭行政推進調査事業費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業) 乳幼児身体発育調査の統計学的解析及び乳幼児の発育・発達、栄養状態の評価に関する研究 (24DB0101) として実施した。

## P-066

## 低出生体重児の摂食機能発達の特徴

大岡 貴史

明海大学 歯学部 機能保存回復学講座 摂食嚥下リハビリテーション学分野

【目的】 低出生体重児は、世界保健機関により出生体重が2,500g未満の児と定義されている。低出生体重児の世界的な発症率は約15.5%、国内では約9.6%であり、近年増加傾向にある<sup>1)</sup>。本研究は、正出生体重 (NBW) 児と低出生体重 (LBW) 児の摂食機能獲得時期の違いを把握し、どの発達段階にて積極的に介入することが望ましいかを明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】 対象は摂食指導経験のあるNBW児50名 (男児31名、女児19名)、LBW児86名 (男児49名、女児37名) である。NBW児の初診時年齢は $3.65 \pm 6.28$ 歳、最終年齢は $21.14 \pm 14.13$ 歳、LBW児の初診時年齢は $5.21 \pm 4.90$ 歳、最終年齢は $25.41 \pm 14.09$ 歳であった。初診から最終診察までの診療録および摂食指導記録から内容の調査を行い、出生体重、在胎週数、粗大運動の獲得時期、経管栄養経験の有無、NICU入室経験の有無、行政サービス利用の有無、摂食機能の獲得時期を抜粋した。対象児が各段階の摂食機能の獲得までに要した期間を算出した。分析方法は各機能の獲得時期についてはWilcoxonの順位と検定、有意差のあった機能獲得時期の要因については重回帰分析を行った。本研究は、本学歯学部倫理委員会の承認を得て行われた (承認番号A2126)。

【結果】 NBW児の経口摂取準備期は $7.02 \pm 6.38$ ヵ月、嚥下機能獲得期は $8.21 \pm 2.91$ ヵ月、捕食機能獲得期は $12.38 \pm 6.74$ ヵ月、押しつぶし機能獲得期は $12.24 \pm 8.21$ ヵ月、すりつぶし機能獲得期は $18.97 \pm 10.03$ ヵ月、自食準備期は $12.14 \pm 8.88$ ヵ月、手づかみ食べ機能獲得期は $18.61 \pm 11.04$ ヵ月、食具食べ機能獲得期は $25.23 \pm 8.20$ ヵ月、運動機能では定顎は $6.07 \pm 4.54$ ヵ月、寝返りは $8.41 \pm 7.35$ ヵ月、座位は $11.68 \pm 7.74$ ヵ月、つかまり立ちは $14.13 \pm 6.18$ ヵ月であった。LBW児は $8.17 \pm 3.26$ ヵ月、 $10.94 \pm 8.41$ ヵ月、 $13.38 \pm 7.45$ ヵ月、 $14.78 \pm 8.23$ ヵ月、 $20.06 \pm 9.87$ ヵ月、 $13.50 \pm 12.27$ ヵ月、 $16.45 \pm 10.97$ ヵ月、 $26.07 \pm 13.92$ ヵ月、粗大運動は $7.30 \pm 3.29$ ヵ月、 $10.11 \pm 5.17$ ヵ月、 $11.61 \pm 3.52$ ヵ月、 $14.85 \pm 4.98$ ヵ月であった。また、LBW児とNBW児の機能獲得には在胎週数が、経口摂取準備期と定顎においては行政サービス利用の有無が要因となっていた。

【考察】 これらの結果から、出生体重だけでなく在胎週数も摂食機能発達に影響を与える可能性が考えられる。また、発達の初期段階において積極的に医療的支援など様々な支援が求められている可能性が示唆された。